わたしはクリスチャン！？　　**ヤコブ 1:26-27**

今日のメッセージ題は「わたしはクリスチャン！？」です。最後に２つマークが着いていますがこれは感嘆符疑問符というようです。つまり驚きと疑問を表しているわけです。自分がクリスチャンであることの驚きと疑問を持つということになるでしょうか。長年、クリスチャンを続けていますと与えられている恵みや祝福に鈍感になってしまっていたり、クリスチャンと言うには何かおこがましい気がして、もっとしないと不安である思いになったりすることがあります。みなさんは如何ですか？　今日はクリスチャンとはどういう存在であるのかということを聖書から学び、喜んで日々歩んでゆけるようになりたいと思います。クリスチャンと言う場合、大きくキリスト教という宗教に入っている人と言えます。ただ宗教と言っても悪い、邪悪な宗教もあれば、今日のみことばにあるようにきよい宗教、正しいまことの宗教もあります。どのように見分ければ良いのでしょうか？　少し余談になりますが日本では宗教というものに敏感になりすぎて宗教を信じないことが良いことだ、自分は無宗教だ、あるいは無神論者だと言う人がいます。しかしそれは日本でだけで外国に出ると通じません。無神論者、神を否定するということは自分は神以上の存在であると言っていると受け止められ、非常に傲慢で高ぶった心をもった人間であると理解されます。さらに言うなら、神を否定するということはすべてのことが無意味なものとなるわけです。すべてが偶然であり、意味や目的を持たない世界です。自分が生まれたこと、生きていること、死ぬことすべてが偶然です。そんなことを言いながら多くの人は、危険な時、切羽づまった時に神様と言ったり、祈り出したりします。ですから自分は無神論者だと突っ張って生きるのではなく、本当の宗教、信仰というものを知らないで探し求めているのだと自分を受け止め、理解していただけたらと思います。

１）宗教とは

さてまず宗教とは何でしょうか？　先々月（2022 年 7 月 8 日）、安倍元首相が銃で撃たれ、亡くなりました。容疑者は「統一協会」という宗教団体によって一家が破綻したため、その団体を憎み、それと関わりのあった元首相を狙ったと自供しています。この事件は間違った宗教がどんなに人の人生を狂わせ、犯罪をもたらし、社会を不安に陥れるかを物語っています。この人のしたことは決して許されることではありません。犯した罪の償いは身をもってつぐなわなければなりませんが、彼もまた、間違った宗教の被害者であったと思います。

統一協会は文鮮明が 1954 年に始めたもので、自分をキリストの再来であると主張していました。彼は「国際勝共連合」というものを作り、共産主義に反対する政治家と結びつき、勢力を伸ばしました。彼は本部をアメリカに移し、アメリカのメディアを買収しました。その資金の多くは日本で「霊感商法」という詐欺によって得たものでした。彼が主催した「合同結婚式」もまた、でたらめで問題だらけのものでした。自分はキリストの再来と言いつつも日本、韓国にいることが出来ずアメリカに渡り、丁度 40 年ほど前 1982 年に脱税の罪を犯し、アメリカで刑に服しています。文鮮明は 10 年前 2012 年 92 歳で亡くなりましたが、後継者によって今も、跡目争いをしながら活発に活動しています。

統一協会はキリスト教ではありませんが、初期の正式名称が「世界基督教統一神霊協会」と言いました。しかし一般の人々にはそんなことは分かりませんので、普通のキリスト教会までも怪しまれました。それで日本では、私たちの教会もそうですが大抵の教会関係のちらしに「私たちは正統的なプロテスタント教会で、モルモン教、ものみの塔、統一協会と関係はありません。これらのことでお困りの方はご相談ください」と教会案内に書くようになりました。

1995 年に「オウム真理教」が「世の終わり」を演出するため、地下鉄サリン事件を起こしてからは、多くの日本人に「宗教は怖いもの」という観念が植え付けられました。そのため、その時以来、日本では福音の伝道が停滞しています。これはとても残念なことです。

英語で「宗教」は“religion” ですが、この言葉はラテン語で「結びつける」という意味の言葉から生まれたとされています。 “religion” は、「人が神にしっかり結びつく」という意味になります。そ

こから、「信心深いこと」や「礼拝」、また、「宗派」などを表すのに使われるようになりました。

宗教とは、ほんらいは、神と人とを結ぶもの、また、人と人とを結ぶものです。人は、まことの神によって造られましたから、すべての人は、神に結ばれてこそ、生きる意味や目的を見出します。また、人は、他の人と健全な関係を持つことによって幸いな人生を送ることができます。それを与えるのが宗教です。しかし、その宗教が人をまことの神ではなく偽りの神々や、邪悪な人間、組織、制度、戒律に結びつける、いや、縛りつけるものであるなら、確かに、そうした宗教は恐ろしいものになってしまいます。ただ間違った宗教、偽物の信仰があるということは、ほんとうの宗教、正しい信仰があるということを教えています。どんなものでも本物があるから偽物が生まれるのです。ですから私たちは、知性を働かせ、本物と偽物とを区別し、まことの宗教、正しい信仰に立ちたいと思います。

２）正しい宗教と間違った宗教

では、正しい宗教と間違った宗教を区別するにはどうしたらよいでしょうか。世界には数え切れないほどの宗教があり、すべてをとりあげることができませんので、きょうは、よく名前にあげられる「統一協会」「モルモン教」、「ものみの塔」、などを念頭において話します。

間違った宗教は、当然のことですが、それが立っている教え自体が間違っています。聖書を使ってはいても、聖書が教えることに従わないのです。聖書以外の「教典」があって、それが聖書よりも権威があるのです。たとえば、統一協会の教典は文鮮明が書いた『原理講論』で、そこにはアダムとエバの堕落に関する荒唐無稽な物語が書かれています。妄想とも思えることがもっともらしい用語によって重要な教えのように書かれているのです。モルモン教の場合、この宗教を始めたジョセフ・スミスが書いた『モルモン教典』が、旧約、新約に続く第三の聖書になっています。ものみの塔は、自分たちの教義に合わせて訳した聖書、『新世界訳』しか認めず、しかもそれは、組織が定めた解釈にそってしか読むことができません。つまり自分の考えや理想があってそれに合わせるように聖書をこじつけて解釈しているのです。「人間の解釈」が「神の言葉」よりも権威があるのです。聖書を神の言葉と信じ、ただ一つの最高の権威として認めることがなければ、このような「作り話」が果てしなく生まれ、人々を惑わすのです。

聖書の教えで一番大切なことは、「イエス・キリストがどのようなお方であるか」ということです。イエスは弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか」と尋ねられました。弟子たちは「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだ、エレミヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます」と答えました。イエスはそうしたことを聞いた上で、もう一度、弟子たちに尋ねました。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが弟子たちを代表して答えました。「あなたは、生ける神の子キリストです。」マタイ 16:16　イエスはこの告白の上に教会を建てると言われました。人はこの告白によって救われます。この告白を持たない教会は本物の教会ではありません。統一協会も、モルモン教も、ものみの塔も、イエスを神の御子とは認めていません。ヨハネ第一 4:1-3 には「愛する者たち、霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。神からの霊は、このようにして分かります。人となって来られたイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていましたが、今すでに世に来ているのです。」とあります。これは一世紀に書かれた言葉ですが、今の時代にはもっと切実なものとなっています。

間違った教えについては、すこし考えればその間違いが分かるのですが、異端的な宗教は、人々に考えさせないようにします。とくに統一協会では、若者を家族や社会から隔離し、集団生活をさせて管理し、洗脳します。若者たちは、組織の言うがままに、安っぽい壺や置物、あるいは印鑑などを高額で売りつける詐欺行為をしても、まったく罪悪感を持たず、かえって、それが「世界を救う」のだと信じ込んでしまうのです。また、偽りの宗教では「教祖」と呼ばれる人が、絶対的な権限を持っていて、その組織を思いのままに動かします。そうした「教祖」たちは、きまって「神から示された」、「神から使命を受けた」「キ

リストの再来だ」と言うのですが、実際は自分の願望、計画を成就させるために、信者や他の人々を利用しているに過ぎないのです。こうしたことは宗教団体だけでなく、さまざまな団体で起こることです。人々の善意を悪用し、裏切る行為です。もし、宗教者が同じようなことをするなら、それは人を裏切るだけでなく、神をも裏切ります。これは、イエス様に従う人の姿ではありません。それは伝道ではなく「宗教ビジネス」です。そういう人たちが「その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』」と言ったとしても、イエスは、その人にこう言われるでしょう。「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」（マタイ 7:22-23）

３）正しい信仰

偽りの宗教、誤った信仰には、他にも多くの特徴がありますが、きりがありませんので、最後に、聖書が教える「まことの宗教」について見ておきたいと思います。

ヤコブはこう言っています。「自分は宗教心にあついと思っても、自分の舌を制御せず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。」（26 節）「自分の舌を制御せず」というのは、たんに「おしゃべり」だということではありません。ヤコブ 3 章に「舌」を制御することの難しさが書かれていますが、そこに「多くの人が教師になってはいけません」（3:1）と戒められています。これは、その戒めに関連しています。人は少し物知りになると他の人に教えたがるようになります。悪意ではないものの語ってはならないことや語らなくてよいことまで口にして、聞く人を惑わせたり、躓かせたりしてしまいます。自分だけが神の真理の深みを知っているかのように勘違いしてしまうのです。本物を正しく信じている人は、神は、自分に語りかけてくださるように、他の人にも語りかけてくださり、他の人を通しても自分を教えてくださることを認めます。

次に、まことの宗教は人々に仕えるものです。27 節は「父である神の御前できよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。」と教えています。「孤児」と「やもめ」は、聖書では、社会的に弱い人々を代表しています。旧約聖書にはくりかえし、「孤児」や「やもめ」を保護すべきことが命じられています。それは、神が「みなしごの父、やもめのさばき人」だからです」詩篇 68:5。本物の信仰を持った人たちは、神の愛を伝える宣教と、それを示す福祉の働きを、世界の各地で進めてきました。自殺防止の「いのちの電話」や尊厳死のための「ホスピス」もみな始まりはクリスチャンの働きでした。

そして、本物の信仰は「この世から自分をきよく守る」ものです。「愛」と共に「聖さ」がまことの宗教の特徴です。聖書は「従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。」ペテロ第一 1:14-15 と教えています。「聖なる者となる」といってもそれは、たんに「とりすましている」ことや「敬虔ぶる」ことではありません。それは、人を退ける冷たいものではなく、人を引き寄せる温かいものです。そのような聖い愛、温かい聖さは、イエスのうちにあり、そのお姿に表れています。

わたしはクリスチャン！？ということで学んできました。主イエスを救い主として崇め、告白し、従うならば主は私たちに愛を与えてくださいます。それをもって私たちは人を愛するようになるのです。神以外のものから愛は来ません。クリスチャンとはそんな大きな恵みが与えられている者であることにもっと驚きたいと思います。また、クリスチャンなのに自分は愛が無いと思っている方、これでもクリスチャン？と思っている方はもう一度どこから神の愛が来るのか考えていただきたいと思います。よもや、自分がもっとちゃんとして立派になったら人を愛せるなどとは思っておられないと思います。ありのままの自分で神の前に出る時に神はありのままのあなたに愛を与えてくださるのです。クリスチャンとはそういう存在なのです。